

孙宗光先生喜寿纪念论文集

日本语言与文化

刘金才 王亚新 编
彭广陆 陈力卫

北京大学出版社

·北京·

图书在版编目(CIP)数据

孙宗光先生喜寿纪念论文集：日本语言与文化 / 刘金才，王亚新，彭广陆，陈力卫编. —北京：北京大学出版社，2003. 12

ISBN 7-301-06779-8

I. 孙… II. ①刘… ②王… ③彭… ④陈… III. ①日语-研究-文集 ②文化-研究-日本-文集 IV. H36-53②G131.32-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2003)第107711号

书 名：孙宗光先生喜寿纪念论文集：日本语言与文化

著作责任者：刘金才 王亚新 彭广陆 陈力卫 编

责任编辑：杜若明

标准书号：ISBN 7-301-06779-8/H·0950

出版者：北京大学出版社

地址：北京市海淀区中关村北京大学校内 100871

网 址：<http://cbs.pku.edu.cn>

电子信箱：zpup@pup.pku.edu.cn

电 话：邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62753334

排版者：北京华伦图文制作中心 82866441

印刷者：

发行者：北京大学出版社


经销者：新华书店

890毫米×1240毫米 A5 15.625印张 420千字

2003年12月第1版 2003年12月第1次印刷

定 价：28.00元

音に聞く
黄塵はいづこ
梅薫る
新生中国
燕京の春
金田一春彦



音に聞く

黄塵はいづこ

梅薫る
新生中国
燕京の春

金田一春彦先生手书

目 录

燕京の春 金田一春彦

语言篇

- | | | |
|------|-----------------------------|--------------|
| 3/ | ことばの伝説 | 田中章夫 |
| 13/ | 言語地理学の新しい展開 | 馬瀬良雄
中東靖恵 |
| 35/ | 「ひと（人）」「もの（者）」「人間」「人物」の使い分け | 佐治圭三 |
| 57/ | 寅太郎の言語発達 | 奥津敬一郎 |
| 79/ | 浅析系助词“や”与“か”在意义、用法上的主要差异 | 潘金生 |
| 97/ | 『圀城』の日本語訳に見られた間接発話行為 | 徐昌華 |
| 111/ | 「私は土木工学が専門だ」等句式的分析及同汉语的对比 | 王亚新 |
| 131/ | 異文化接触場面における言語行動意識の気づきを促す実践 | 徳井厚子 |
| 145/ | コミュニケーションを育む目標を指して | 趙華敏 |
| 157/ | 日本語の目的構文の基本的構造 | 劉振泉 |
| 173/ | 日本語の複合格助詞について | 馬小兵 |
| 183/ | 山口県文書館蔵角筆文献「古文真宝前集」について | 柚木靖史 |
| 199/ | 中国から来た日本語四字成語 | 顧明耀 |
| 221/ | 中日料理名の比較 | 彭広陸 |
| 249/ | 日语“虎”词考 | 李国栋 余翌珍 |
| 255/ | 日本人汉字观之流变 | 潘钧 |
| 271/ | 中日同形词之间的词义互补问题 | 陈力卫 |

文学・文化篇

- | | | |
|-----------|---------------------------|-------|
| 293/ | 大江健三郎の文学 | 平岡敏夫 |
| 301/ | 民話表現論序説 | 田中瑩一 |
| 325/ | 西鶴遺稿の挿絵 | 岡本勝 |
| 343/ | 「ほととぎす」を通してみた『枕草子』 | 李曉梅 |
| 361/ | 異邦人のまなざしと翻訳文学のオリ
ジナリティ | 陸晚霞 |
| 381/ | 安芸国分寺跡出土の木簡・墨書土器をめ
ぐって | 佐竹昭 |
| 401/ | 熊阪 台州『文章緒論』について | 大久保隆郎 |
| 421/ | ブックロード | 王勇 |
| 435/ | イザナミ、オホケツヒメ神話の原像 | 楊剛 |
| 451/ | 西鶴作品中的主情主义伦理 | 刘金才 |
| 467/ | 信息化、全球化时代的日本新宗教 | 金勋 |
| 475/ | 中国の高等教育 | 苑復傑 |
| 485/ | 回顧と感謝 | 孫宗光 |
| ～・～・～・～・～ | | |
| 493/ | 编者后记 | |

语言篇



ことばの伝説

田中章夫

孫先生ともご親交があった、故・徳川宗賢さんが生前よく「ことばの伝説」ということを言っていた。ことばについて、世間でよく言われ、一般に広く知られているにもかかわらず、いざ調べてみると、はっきりした証拠がなく手がかりがつかめない、といった類いのことを「ことばの伝説」と名付けたわけである。そうしたものの、いくつかを取り上げて、わたしなりに調べてみたことを報告することにする。

しかし、もともと証拠がつかみにくいことを承知のうえでのことなので、歯切れのいい結論は期待しえない。むしろ問題提起としてお読みくださって、ご意見やご教示をお寄せいただければ幸いである。

1. ウナギの引き札

日本の広告や、その歴史について書いたものを読むと、ほとんど例外なく、江戸時代に平賀源内が書いたウナギの引き札(チラシ広告)のことをとりあげている。そして多くは、土用のウナギの効用を説いて、夏場に売り上げが落ちるウナギ屋の窮状を救ったなどとしている。

しかし、『平賀源内全集(平賀源内全集顕彰会・1989年・平成1)』や源内の伝記の類、たとえば、城福勇『平賀源内(人物往来社・1986年・昭和61)』、芳賀徹『平賀源内(朝日新聞社・1989年・平成1)』などには、有名な「清水餅の引き札」をはじめ、さまざまな引き札の文案が紹介されているにもかかわらず、ウナギの引き札の SCRIPT は見あたらない。ただし、土用のウナギについては、源内の随筆や雑文の類を集めた『天保佳話(1838年・天保8)』に、つぎのような記述がみられる。

鰻 土用 鰻

土用の丑の日に鰻を喫ふ事は鰻 夏瘦を療するものなればなり殊に丑は土に属す土用中の丑の日は両土相乗ずるものなり萬葉に憶良等に我もの申す夏瘦によしといふなるむなきめしませとあれば古より夏瘦には鰻を食事と見えたりウム相通

しかし、すくなくともチラシ広告の形で、平賀源内が土用のウナギにかかわりを持ったという、はっきりした証拠はないようである。

三、四年前にNHKテレビの「日本人の質問」で、平賀源内がとりあげられたときも、やはりウナギの引き札について触れていた。この放送の最後に芳賀徹さんが解説をしておられたので、早速、「ウナギの引き札」の典拠を問い合わせたところ、つぎのようなお返事をいただいた。

拝復 御質問のお手紙を拝見いたしました。さすが痛いところを突かれたと思いました。鰻の蒲焼のことを「サイテヤーク」と言ったなどは、源内の、あるいは源内関係の文章のどこにも出てきません。(中略)『平賀源内全集』の上巻の「飛花落葉」の中に「はこいりはみがき漱石香」と「きよみずもち」と「^{ひまのやから}麦飯 報條」の三小篇が載っていて、いずれも痛快な文章です。「土用の丑の日」

のうなぎ宣伝も大いにありえたというところ。なにとぞ御容赦のほどを。

早々

たしかに、このあたりが「土用の丑の日の鰻」の出所のように、当時の広告界の人気者だった平賀源内が「土用の鰻」の宣伝にかつぎだされたとみるのが妥当なところであろう。

2. 日本一短い手紙

越前（福井県）丸岡城主・本田飛弾守成重（幼名・仙千代）の父・本田作左衛門重次が、若いころに妻にあてた手紙

一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ

は「日本一短い手紙」として、丸岡町の町おこしに大いに貢献している（福井県丸岡町『日本一短い手紙 私へ 一筆啓上』角川書店・1991年・平成3）。

福井大学で開催された、2001年度国語学会秋季大会の翌日、丸岡城を訪れて資料館でこの手紙の出典を尋ねてみた。その場では返事をもらえなかったが、後日丸岡町商工観光課から、「出典資料は見あたらない」というご連絡をいただいた。

そこで、当時、福井大学におられた、小川栄一さんに問い合わせたら、神沢貞幹の『翁草』と、明治時代の雑誌『三百諸侯』の二つを指摘してくださった。

江戸時代の神沢貞幹の随筆『翁草（1791年・寛政3）』にこの手紙が「一筆申す 火の用心 おせん病ますな 馬肥せ」の形で出てくることは知られており、小著『日本語の位相と位相差（明治書院・1999年・平成11）』にも引用しておいた（243ページ）が、原文は、つぎの通りである。

作左衛門は萬づ無造作にて、或る時御用にて遠所に滞留して、留守の妻へ送文に、一筆申す火の用心おせん病ますな馬肥せと書送しとぞ、おせんとは女の名なりとかや（巻之百五十五「小牧長久手戦後家康公上洛の事」の条）

一方、『三百諸侯』は戸川残花（安宅）が主宰し、博文館から1894年（明治27）3月に創刊された雑誌で、その巻之五・第三本田の「本田作左衛門」の章に、つぎのような記述がある。

重次の人となりは斯くの如し、或時旅より女房の方へ書状をおくり、

一筆申す火の用心、おせん、やさすな

馬こやせ、かしく

と書きし人なり。おせんとは一子仙千代のことなりとぞ。文勢直截にして百丈の瀑布に對するの觀あり、重次と云ふ魁偉の好漢が字句の間に彷彿として隱現するを見る。（「衆中にて家康を罵る事」61ページ）

ご覧の通り「一筆申す 火の用心 おせんやさすな 馬肥やせ」である。「やさすな」には「瘦さすな（瘦セサセルナ）」が、当てられようが、当時、武蔵大学におられた石井久雄さんに、この話をしたら、「や（さ／ま）すな」は、草体の「ま（満）」と「さ（佐）」の混乱とも考えられるのではないかという見解を述べられた。

『翁草』も『三百諸侯』も、本田作左衛門の時代から200年～300年の時を経たものであり、原形を伝えているかどうかは疑問である。しかし、現在のところ、「（おせん）泣かすな」の典拠は見あたらない。

冒頭の「一筆啓上」はいずれも「一筆申す」となっている。「一筆啓上」も「一筆申す」も、手紙の頭

書としては古くから用いられたものなので、どちらもありうるが¹⁾、この手紙に、実際にどちらが使われていたかは定かでない。

また、『三百諸侯』は、上にある通り「おせん」を嫡男・仙千代（のちの丸岡城主・本田成重）とし、『翁草』は娘としている。この点もはっきりしない。

結局、「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の典拠はわからずじまいになってしまったが、ながく都立高校の国語の先生をしておられた、曾根脩さん（元・都立江戸川高校長）によれば、この手紙は、典拠や由来の不明なもの例として、司書研修でとりあげられるほど、図書館関係の人々の間では有名なものだという。

3. 京へ筑紫に坂東さ

1608年（慶長13）に刊行された、J. ロドリゲス（Joao Rodriguez）の『日本大文典（Arte de Lingoa de Iapan）』に「京へ筑紫に坂東さ」のことわざが掲載されていることはよく知られているが、この箇所には、つぎのような説明がついている。

都では助辞Ye(へ)を用ゐるが、これが正しいのであって、下(しも)では大部分の地方でNi(に)を用ゐ、関東では助辞(Sa)を用ゐる。それ故一つの諺、即ち、ある言ひ種が日本に行はれてゐる。それは次のやうにいふ。

Quioye, Tsucuxini, Quanto I, Bandosa（京へ、筑紫に、関東、又は、坂東さ）諺その意味は、都ではYe(へ)を、下ではNi(に)を、関東ではSa(さ)を使ふといふのである。（中略）諸地方に色々な助辞があるけれども、常に都に於けると同じくYe(へ)を用ゐるのがよい。それが正しく且上品だからである。

（土井忠生・訳『日本大文典』三省堂・1955年・昭和30・407～8ページ）

J. ロドリゲスは、この『日本大文典』のなかで、外国人宣教師の学ぶべき日本語は「一般に通じる言葉遣として日本全国の権威ある人々や文学者によって承認され、主として『都』で『公家』の用ゐる言葉」であるべきだとし、さらに、つぎのようにのべている。

如何なる言葉遣であっても、日本の諸国諸地方で地方人の或者が不正確に用ゐてゐるものは、この国に於ける欠陥とされ、粗野とされる色々な訛謬や不正確な言葉遣を持ってゐるから、それを取るべきではない。（316ページ）

したがって、J. ロドリゲスは、少なくとも当時の京都の言葉については、かなりの見識を持っていたばかりでなく、方言にも関心を払っていたものと思われる。²⁾

この『日本大文典』より約百年あまり前の、三條西実隆の『実隆公記』明応五年正月九日の条に、連歌師の宗祇の語った話として、つぎのような記述が見られる。

宗祇談

京ニ、ツクシへ、坂東サ、

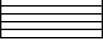


京ニハイクニユクナト云、筑紫ニハイツクヘユクト云、坂東ニハイツクサユクト云、又坂東ニハヨと云所ニ、ロト云詞ヲツカフ、セロ セロ也、如此境談アリ、

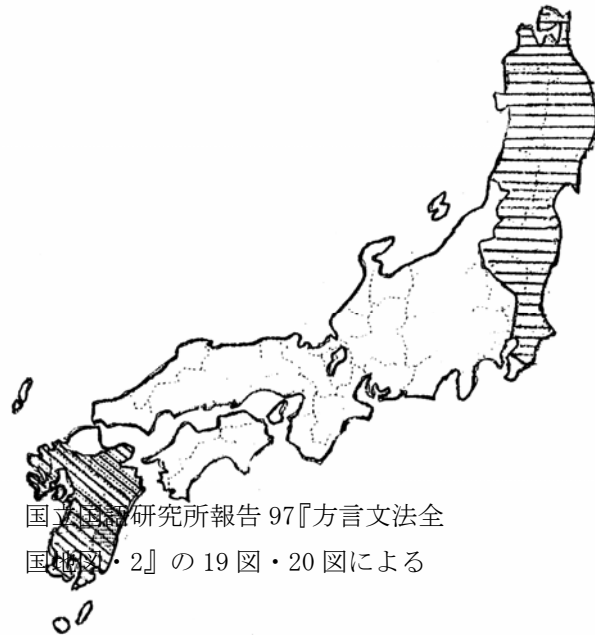
明応5年は、西暦1496年にあたるが、その40年後に抄物『四河入海（1534年・天文3）』には

日本デモ、筑紫ニ、京へ、坂東サト云類ソ（巻19-1）

という記述がある。

古典語の「～ニ」と「～へ」については、青木令子さんのくわしい調査がある。それによれば、奈良・平安期を通じて、「～着く・～至る・～来（る）」など目標や到達点を示す場合は「～ニ」が用いられるのが普通だったという。しかし「～行く・～参る・～渡る」のような「自分から遠ざかる動作」の場合や、漠然とした目標あるいは、遠い場所を目指す場合には、古来「～へ」も用いられ、これが「～へ」は「方向を表す」といわれてきた理由だろうとする。院政・鎌倉期から「～へ」は次第にその用法を広げ、

-  ～サが優勢な地域
-  ～へが優勢な地域
-  ～ニが優勢な地域



国立国語研究所報告 97『方言文法全国地図・2』の19図・20図による

図1 「東の方(サ・へ・ニ)行け」

「東京(サ・へ・ニ)着いた」をどうするか

時代とともに「～ニ」にとってかわって「～へ」が優勢になってきたという。³⁾ したがって16世紀末から17世紀初頭の『日本大文典』のころには、京都では、すでに「～ニ」から「へ」に移行していたとみることができる。

しかし、『実隆公記』『四河入海』の「筑紫へ」の方はどうもよくわからない。「筑紫」は、いうまでもなく今の九州地方をさすものであるが、九州は「～ニ」が優勢な地域であり、国立国語研究所の『方言文法全国地図・2』の図19・図20でもほぼ全域で「～ニ」が優勢になっている(図1参照)。

幕末から明治以降の九州出身の作家と江戸・東京生まれの作家について「～ニ」と「～へ」の使用状況を調べた鶴岡昭夫さんの調査⁴⁾があるが、この調査でも、九州出身の作家は「～行く」の場合も「～来る」の場合も、「～ニ」を用いる傾向が強いことを指摘している(図2参照)。

「～へ」から「～ニ」への史的变化はちょっと考えられないので、このあたりは方言学の知見を得たいところである。

最後の「坂東さ」は、近年まで、関東から東北一帯は「～サ」の優勢な地域であった⁵⁾。しかし、江戸ことばの資料では「～サ」は田舎者のことばを描写したような場合に限られ、一般には「～へ」が用いられていた⁶⁾。これは、西の方から移り住んできた上方の商家や徳川家臣団によってもたらされたものであろうが、江戸ことばが周囲の関東方言と際違った違いを見せ、いわゆる「言語島」を形成している典型的

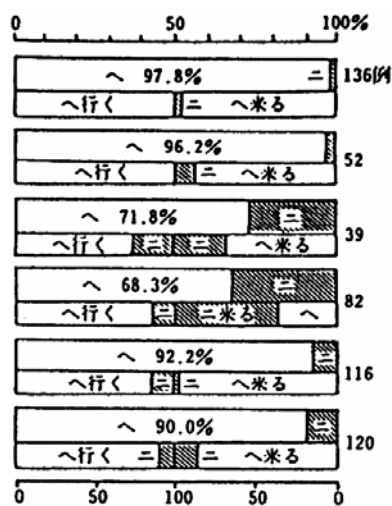
な例といえる。

江戸ことばに「～へ」が多用されていたことは、早く湯沢幸吉郎さんが『江戸言葉の研究』で指摘しているが⁷⁾、「～ニ」が一般化するの明治以降であり、これは明治期における九州勢の東上の結果とみられる。これによって、東京のことばの中に「～ニ」と「～へ」が共存することとなり、その間に微妙な使い分け、すなわち「～ニ」は帰着点を表し、「～へ」は方向を表すといった用法上の分化が生じてきた。こうした使い分けを否定するわけではないが、「(低気圧が) 東ニ／へ進む」はどっちだといわれたら、東京出身者でも決めかねるほど微妙な差違であり、こうした違いを、あえて教育の場に持ち込むことは慎むべきであろう。こんなことよりも、出身地によって「ニ」を使いやすい人と「へ」を使いやすい人とがいるという、とらえ方の方が、日本語の現状を正しく伝えることになる。

ところで、この「京へ 筑紫に 坂東さ」について、京都育ちの横井清さんが、京ことばは「～ニ」であるとする、つぎのような発言を『ぶっくれっと・98 (三省堂・1992・5月)』によせている。

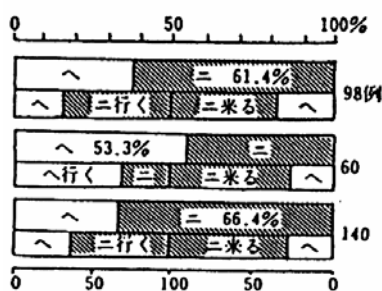
・A 東京 (江戸) 出身作家の場合

- 牡丹燈籠 (三遊亭円朝・明 17)
- 浮雲 (二葉亭四迷・明 20)
- 五重塔 (幸田露伴・明 24)
- 金色夜叉 (尾崎紅葉・明 30)
- 坊ちゃん (夏目漱石・明 39)
- 腕くらべ (永井荷風・大 6)



・B 九州出身作家の場合

- 熊「不如帰」 徳高蔵花
- 本「浜子」 草村北星
- 長「もしや草紙」 福地桜痴
- 崎「今日心中」 広津柳浪
- 福「談薈」 小宮豊隆
- 「蔵の中」 宇野浩二
- 岡「鶴」 松本清張



(鶴岡昭夫「近代口語文章におけるニとへの地域差」による)

図2 「ニ」と「へ」の消長

(前略)京ことばでは、「方向をしめす助詞」として常用され続けてきたのは、圧倒的に「に」である。(中略)数年ぶりに、市内で手広く酒類販売会社を営む小学生時代の友人T君(下京区)に電話してみた。即座に明快な答えが返ってきた。言われてみればそのとおりで幼少時より一貫して「に」だと断言し、「何処何処へ…」という場合ももちろんあるが、それは改まった感じで物言いをしている時だと思う、との由。

さきに紹介した国立国語研究所の『方言文法全国地図・2』の図19では京都府下の12の地点で「～ニ」は記録されていないが、これについては、京都生まれ京都育ちの方々のさらなる証言を得たい。

注

- 1) 橘豊『書簡作法の研究』風間書房・1977年（昭和52）。
- 2) たとえば「関東ベイ」の記述など。小著『東京語—その成立と展開』（明治書院・1983年・昭和58／1988年・昭和63）5ページ。
- 3) 青木伶子『「へ」と「に」の消長』（『国語学・24』1956年・昭和31）。
- 4) 鶴岡昭夫「近代口語文章におけるニとへの地域差」（『中田祝夫博士記念論集』勉誠社・1979年・昭和54）。
- 5) 小著『近代日本語の語彙と語法』（東京堂出版・2002年・平成14）434ページ。
- 6) 前出『近代日本語の語彙と語法』432ページ。
- 7) 湯沢幸吉郎『江戸言葉の研究』（明治書院・1957年・昭和32）555ページ。

(TANAKA Akio 東呉大学客座教授)

言語地理学の新しい展開

—グロットグラムの方法とその実践—

馬瀬良雄 中東靖恵

はじめに

日本では言語地理学の新しい展開としてグロットグラム (glottogram) という方言研究法が開発され、その実践報告も多い。小論はこの新しい方言研究法を取り上げる。全体を2部構成とし、第1部グロットグラムの方法、第2部グロットグラムの実践とする。第1部ではグロットグラムの方法を言語地理学と対比しつつその特徴を述べ、この方法が開発された経緯や背景などを述べる。第2部では山陽地方岡山—広島—下関ラインのアクセント・グロットグラム142図の中から6図を紹介、それを解釈し、この地域のアクセントの動態を明らかにする。実践例としてこのラインを選んだのは、孫宗光先生が広島女学院大学にご在職当時、広島を中心にこの地域をよく旅行され、この地がゆかりの地であることも理由の一つである。

1. グロットグラムの方法

1.1 言語地理学とグロットグラム

グロットグラムは、西欧で興った言語地理学¹⁾の日本での受容と発展²⁾の中で、独自に開発された方言研究法である。両者は語の歴史的変遷とそのプロセスを明らかにするという点では、共通の目的を有するが、方法の上では異なる。

言語地理学を「言語地図を使って行う方法研究」と規定する。これはヨルダン (I. Jordan) が言語地理学を「das kartographische Studium der Mundarten」(the cartographical study of the vernaculars) ととらえた (Jordan, I. 1962, p.171) ものに近い。

次にグロットグラム。グロットグラムとは、「ある地点からある地点に至る線上における多世代話者の言語一覧図」と解してよい。これを用いて行う方言研究法を、グロットグラム方言研究、略してグロットグラムという。

この二つの方言研究の最も大きな違いは、前者が言語地図という「平面図」を用いるのに対し、後者はグロットグラムという「立面図」を用いて論を進める点にある。

語の歴史や語の変化プロセスの解明という点で二つの方法はどんな特徴を持つか。まず、言語地理学について言えば、言語地図は一定の拡がりのある地域における語の投影図であるので、自然・人文地理学的条件を参照しつつ、面におけるこの目的を追求するのに長じている。だが、なにぶんにも単世代の言語投影図を手掛かりとしているので、必ずしも満足の行く結果の出ないことも往々にしてある。

一方、グロットグラムによる研究法は、多世代にわたる言語展示図を扱うので、所与の線上において

は目標達成に大きな強みを発揮するが、地域的な広がりを持つ「面」においては多くを望むことはできない。

言語地理学は、どちらかというところ現在の言語から過去の言語にさかのぼる歴史的研究に威力を発揮するのに対し、グロットグラムの研究法は、現在から将来に向けての語の発展の予知にも大きな力を持つ。そして何よりも現代における語の変化プロセスやその要因を探るという点では、大きなパワーを持つ。

そこで両者は、併用することにより、より実り豊かな成果を生むことが期待される。両者は対立関係にある研究法ではなく、互いに単一でも独立する方法でありながら、補完関係にある研究法と行うことができる。それはグロットグラムの研究法が言語地理学の発展の中で生まれたという経緯によってもうかがうことができる。

以上、言語地理学とグロットグラムの研究法を対比しながら、両者の特徴とするところを述べた。

1.2 日本における言語地理学の方法論の展開とグロットグラムの方法の模索

ここでは西欧に興った言語地理学が日本に受容された後、方法のうえでどのような展開をして来たかを、グロットグラムの研究法の開発との関連で見たい。

言語地理学の研究は、「ある地点の構成員の言語は均質である」という仮説の上に構築された。だから言語地理学の最初の輝かしいモニュメント、『フランス言語地図』(ALF) (1902-12) で、ジリエロン (J. Gilliéron) は話者の年齢差に基づく方言の違いにはあまり注意を払わなかった。言語地理学の調査で 10 代の話者が中・高年層話者と同列に扱われるなどは、現在から見ると考えられないことである。この点には後に種々の批判を招くことになるのだが、にもかかわらず、ALF があれだけの成果を収めたのは、そこに住む構成員の言語に働く要因として、「地域」が絶大な力をふるっていたのに対し、「年齢」の要因はそれほど大きな力を持たなかったことによる。

だが、日本でも 4、50 年前まで、少なくとも言語のある面では同じような状況にあった。山村、長野市小田切 (旧長野県上水内郡小田切村) で、高年層と中学生のアクセント調査³⁾を行った。1961 年のことである。その共通語化率の平均を見ると、高年層 28.6%、中学生 36.1% で、確かに中学生の方が数値は高いが、その差は 7.5% と決して大きな差ではない。年齢の要因は共通語化に対して働いているけれども、そんなに強くはない。それがそれから 18 年経った 1979 年には次のようになる。高年層 28.5%、中学生 81.2%。高年層の数値は全く動いていないが、中学生では 45.1% の大幅アップとなり、両世代の差はなんと 52.7% にも及ぶ。つまり、このころになると長野市の山村でアクセントという比較的意識に上ばらない分野でも、「年齢」という要因が大きく働いて共通語化が急速に進んでいることを知る。

さて、日本の言語地理学が世界の言語地理学研究と肩を並べることになったと言われる国立国語研究所『日本言語地図』全 6 巻 (大蔵省印刷局、1966~75) の調査では、話者選定の基準を次のように定めている (国立国語研究所 1966、pp.24-5)。

生年・性—1903 (明治 36) 年以前出生の男子 (1 名)。ただし、1887 (明治 20) 年以降の生まれの人が望ましい。(略)

居住経歴—いわゆる言語形成期をずっと調査地点で成育し、しかも、それ以後も、よそ (その市・町・村の外) での生活が、兵歴など一切を含めて 36 ヶ月を越えないもの。(略)

つまり、初期の頃の言語地理学の話者選定基準に、社会言語学的色彩が加わってきているのである。

ここでは世代と性が一定であれば、地点内の集団構成員の言語はほぼ同一であるとの判断に立っていると見られる。日本の言語地理学的調査では、話者選定にあたって同一世代（高年層）・男性という基準を設けているものが多いのも、この基準を妥当なものとして受け入れたからであろう。

ことばの世代差の問題を少し推し進めると、言語地理学の調査を老若2世代について行い、それぞれの資料によって作成した地図を比較・考察して、より妥当な結論を得るという試みに行き着く。2世代の比較によって少なくとも50年前と現在の言語状況が分かる。そこでこの方法による方が、単世代の資料に基づく従来の言語地図の考察に比べ、より確度の高い結論が期待できることになる。そして、従来の言語地理学ではそれほどやさしくなかった言語の将来の予測に道を開いた意義も大きい。

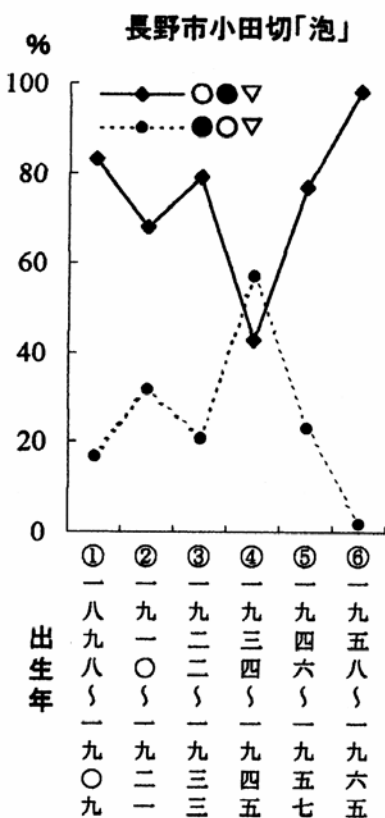
この立場から研究を推進した学者に藤原与一がいる。氏の畢生の大作『瀬戸内海言語図巻』上下巻（東大出版会、1974）では、話者は老若2世代、共に女性で、高年層1名（60歳代）、若年層2名（中学2年生）とした。女性を話者としたのは、女性の方が、高年層ではより古いことばを話し、若年層ではより新しいことばを使うとされることから、女性2世代を扱う方が男性のそれよりも言語の世代的変動の振幅は大きく、考察に有利であると判断したからであろうと見る。

だが、言語の世代的変動が加速されると、2世代調査ではその跡を追い切れない場合も多くなる。例えば、ある項目の高年層地図では全域を語形Aが覆い、若年層地図では全域を語形Bが覆っているという場合も少なからず見られる。これだとAがBと交替したという結果は分かるが、AからBへ移る過程が見えて来ない。あまりに素早い交替で取り付く島もないのである。いつ頃からどのような要因で変動が始まり、いつ頃それは完了したかを探るすべがないのである。

具体例をあげる。長野県史刊行会編（1992）で「命」のアクセントを見る（pp.718-9）。ここには長野県下424地点の高年層と中学生の「命」のアクセントが載る。高年層では全域が中高型（○●○）で覆われ、頭高型（●○○）は数えるほどの地点しかない。ところが中学生では一転し、頭高型（●○○）が全域を覆い、中高型（○●○）は僅かに4地点となる。○●○（高年層）>●○○（中学生）の交替のあったことは分かるが、そ

かなり難しい。しかし、高年層頭高型一色の分布を予測する代調査はそれなりの意味がある。さらに次のような場合も考

形Aが分布し、一見何事もなしの語形Aは世代が若くなるにAを押さえるに至る。ところが現れ、やがて若年層では語の世界となる。こうなると高の意味も持たないことになる。これも具体例をあげる。右のアクセントの多世代調査結



層の地図だけだと、中学生におけることはまったく不可能であり、2世

方法と言える。えられる。高年層も若年層も同じ語

果をグラフにしたものである。第1に超えて●○○を軽く押さえている。もある。ところが世代が若くなるに○●○はぐんぐん下降し、替わっが上昇し、第4世代では両勢力は逆

転する。だが第5世代から一旦は下降した○●▽は、急カーブで上昇に転じ、かつての水位に復しただけでなく、それを追い抜くに至る。この場合には、老若2層の言語地図の資料だけでは、「泡」のアクセント $A > B > A$ は追い切れないことは明らかである。

こうした細かな言語の世代的変動を明らかにするためには、世代をさらに細分化して3世代調査、4世代調査をすることが一つの方法である。事実それに取り組んだ論文も現れた。前者に清水郁子(1971)、後者に小林滋子(1961)がある。

多世代言語地理学調査を4世代調査で考えよう。仮に200地点調査とすると、単世代調査ならば200人で済むものが、4世代調査だと一挙に800人調査となる。大変な労力を伴うことになる。それよりも単世代調査として地点間の密度をさらに高めた方がよい、同じ地点密度で調査地域を広げた方がよい、あるいは項目数を増やした方がよい—様ざまな意見が出よう。そして我々は1項目につき4枚の言語地図を作成し、それを検討しなくてはならないということにもなる。これらをどう勘案したらよいか。

柴田武がヘッドとなり、W.A.グロータースと徳川宗賢らが行った新潟県西部、糸魚川地方の方言調査では、従来の言語地理学調査に改善が加えられ、数々の新機軸が打ち出された。①語を示し意味を聞く調査、②理解語の調査、③方言境界の意識調査、④言語作品の調査、⑤民俗学関連の調査、などがその主なものである。このほかに、糸魚川市根知谷の梨の木と糸魚川市田海川の横地の2集落でそこに居住する全員の言語調査を行った。主要な目的は、高年層の分布調査の情報を元に推定した語の変遷の跡と、特定集落の高年層から若年層にかけての実際の変遷とどう結び付くかを検証しようというものである。調査項目は根知谷、田海川で対立または錯綜している語を含むものとし、その数、梨の木25、横地37。調査人数は梨の木40人、横地69人⁴⁾。

調査結果を概観する余裕はないが、調査が上の目標達成に極めて有効であることが判明した。全数調査をさらに集落数を増やして行うことは、望ましいことではあったが、言うは易いが、行うは難しく、もっと明快で、有効な手段はないか、模索は続く。

1.3 グロットグラム方言研究法の誕生

言語地理学の研究では、語の歴史や語の変化プロセスの解明に向けて数々の模索があり、幾つかの新しい方法が試みられ、努力は続いた。この中からグロットグラムによる方言研究法は誕生した。それは言語地理学に新機軸を打ち出した「糸魚川言語地図のための調査」の延長とも言うべき調査研究から生まれた。この方法を中核として推進したのは先年急逝した徳川宗賢。彼はまだ30代の若さだった。

初の記念すべき調査は1969年2月2日～11日と3月18日～27日の2回に分けて行われた。調査地域は糸魚川市東部にある行き止まりの谷、早川の流域。河口部の集落梶屋敷から最奥の集落上場までの27集落が調査地点として選ばれた。話者数274人。生え抜きであることを条件に、男性170人、女性104人。最高年齢92歳、最低年齢7歳。調査項目40。調査者は、徳川宗賢、本堂寛、佐藤亮一、高田誠とW.A.グロータースの5氏。

ここでグロットグラム研究法誕生について2点書き加えておこう。

肝腎なことだが、誰によって、あるいは誰が中心となってこの方法が開発されたかという点になると、なぜか正式な記録がない。だが、私はそれを徳川宗賢と見る。

理由は二つある。一つはこうである。1966年11月26日、東京都立大学方言学会で馬瀬は方言区画論について発表をした。間もなく徳川宗賢から長文の手紙が届いた。発表について論評したあと、後にグロットグラムとして開花する新たな研究法を、略図を用いつつ、熟っぽく述べていた。その時の鮮烈な

驚きを今も思い出す。

もう一つは、彼の言語地理学関係の論文を収めた徳川宗賢（1993）の巻末の「補記」における次の述懐（同書 p.611）である。

おぼろげな記憶であるが、このグロットグラムの着想については、加藤正信氏が日本言語学会の第45回大会（1961年10月・静岡大学）で佐渡の〈ねこやなぎ〉の方言についての研究（その後『言語研究』42、1962年10月に投稿）を発表されたとき、同氏に感想を述べたときにも触れたような気がする。地域差×年齢差以外のものが多いいろいろありうる、などと話した。加藤氏は記憶しておられるだろうか。

これら二つから、このアイデアを思い付き、これを暖め、これを一つの方言調査法、方言研究法にまで高めたのは、徳川宗賢であることに間違いない。しかし、「糸魚川言語地図のための調査」の統轄者柴田武やW.A.グロータースのアドバイス、グロットグラムの初の調査の参加者、本堂寛、佐藤亮一、高田誠らの意見も採り入れられたものと思う。

もう1点は、グロットグラムという名称の発案者は、初のグロットグラムの調査に参加した高田誠であったことである。徳川宗賢はその間の事情をこう記している。引用は徳川宗賢（1985）を採録した徳川（1993、p.376）による。

グロットグラムなる呼称は、1969(昭44)年3月27日の朝、われわれが宿泊していた糸魚川新町の山川旅館で、資料整理を行なっていた際にはじめてわれわれの口にのぼったことを思い出す。口火を切ったのは高田誠であったと記憶する。グロータースが調査の中間資料を持って糸魚川市のロータリークラブで講演するために、みんなで大きな紙に資料の転記をしている時のことであった(補記。グロータースの日記による)。

ただ、筆者らはグロットグラムという名称に必ずしも賛成でなく、「地理年代言語図」のような命名の方がこの研究の内容をよりよく表していると思う。さらにこの呼称は、グロットグラムとして実験音声学の分野ですでに用いられているという事実もある。徳川宗賢はこれに気づいていた。真田信治（2002、pp.355-6）に、徳川宗賢からの私信として次の文が載る。

グロットグラムということばは、われわれの専売かと思っていたら、実験音声学で使うらしい。国語学大辞典の索引を見ていたら、グロットグラムなる項目が目撃された。「光電グロットグラム」とか「超音波グロットグラム」などの語があるらしい。(p.469、3段目)(略)(1994年5月16日付け)

グロッター (glotto-) は、この場合、「声門の」の意味である。これらを考えると、グロットグラムという呼称はやはり適当ではなかった。しかし、グロットグラムはすでに方言研究の分野で市民権を得てあまりにも広く使われているので、そのことを記したうえで、この術語を小論では用いた。

ここで再び1969年2月、3月に行われたグロットグラム調査に戻る。この記念すべき調査の結果は、早くもこの年1969年5月24日の国語学会（京都毎日ホール）で、「語の盛衰」の題目で調査にあたった5名の共同発表の形式をとって発表された。発表者は徳川宗賢。この発表が方言研究に及ぼした影響は大きかった⁵⁾。

2. グロットグラムの実践

第2部では、グロットグラムの実践として、馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵（1995b）の「山陽地方